特集◇ 市民の力で オオルリシジミの舞う安曇野へ

絶滅危惧種の蝶「オオルリシジミ」の生息域を拡げようと、長年保護活動などに携わってきた地元市民団体等が企画する「オオルリシジミの食草クララ2020本を市内全域に植える活動（主催：岩原の自然と文化を守り育てる会）」のオープニングセレモニーが６月27日、堀金支所で開かれ、記念植樹と苗の配布（写真右）、講演会が行われました。

講演会では、信州大学名誉教授の中村寛志さんや日本自然保護協会の萩原正朗さんをはじめ、研究や保護活動に携わる皆さんの発表があり、多くの市民が参加しました。

穂高西小学校　４年生
等々力　愛花さん

学校近くの公園で本物のオオルリシジミを見て、すごくきれいでした。蝶が来てくれるのを楽しみに、家の庭に植えます。

講演会レポート

生息環境を守ることが大切

安曇野オオルリシジミ保護対策会議
代表　那須野 雅好さん

オオルリシジミは25年にわたる保護活動により、今では国営アルプスあづみの公園の保護区を中心に自然発生するようになりました。これも関係する多くの皆さんや関係機関のご協力のおかげです。

オオルリシジミがここまで減ってしまったのには理由があります。この蝶の幼虫はマメ科のクララにのみ依存し、しかも花・蕾（つぼみ）か食べないという極めて狭い食性であったこと。そして、圃場（ほじょう）整備などの開発で、クララの自生地がなくなったことにより、オオルリシジミも一蓮托生の運命をたどったのです。

岩原区の皆さんが「クララを増やし植えよう」という活動を推進していますが、これはオオルリシジミの保全にとても役立つと思います。

また、安曇野の先人たちは原野を切り拓き、長い年月をかけて、水田や集落の景観を形作ってきました。そうした環境の中にクララはあり、当時の人々の生活にも利用されてきました。クララが増えることはオオルリシジミの保全だけでなく、かつての安曇野の原風景を創造することにもつながるのです。

広い畦（あぜ）のある風景

かつての生息地に蝶を舞わせたい

地元である岩原区に貴重なこの蝶がまだ生息していたことが確認されたのは、昭和53年、今から42年前のことでした。その後、この生息地は国営アルプスあづみの公園となりましたが、計画当初から今日まで、関係者は連携して保護活動を続けています。

蝶を守るために、駐在所の署長さんの指導を受けて柵や看板を設置しても、おかまいなしで保護している場所に侵入されました。マニアの侵入は、早朝から、何組も、何日も続き、見張りを務めた体験から、侵入を完全に止めることは不可能であり、このままイタチごっこを続けていたら、安曇野のオオルリシジミは絶滅してしまうという強い危機感を覚えました。

そこで、仮にマニアに採られても、絶滅しないだけの蛹（さなぎ）を安定的に確保しようと、人工飼育をするようになりました。

飼育を始め、20年以上たちますが、ピーク時には1400を超える蛹（さなぎ）をつくり、国営公園内に放蝶していましたが、今では、国営公園内で自然個体群が復活したこともあり、必要最低限の100～200の蛹（さなぎ）を確保しています。

クララに網をかけ、人工飼育を行う
猿田久雄さん

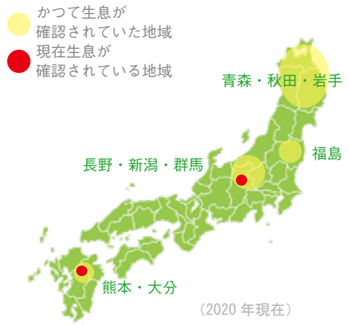
オオルリシジミ

国・県・安曇野市のレッドリストでいずれも最も絶滅に瀕していることを示す「絶滅危惧Ⅰ類」に分類されています。さらに、長野県、熊本県では指定希少野生動植物に指定され、無断で捕獲・採集することは条例で禁止されています。

オオルリシジミ（長野県産）

オオルリシジミの生息地

オオルリシジミ（学名：Shijimiaeoides divinus）は瑠璃色の翅（はね）を持つ、大型のシジミチョウです。幼虫はマメ科のクララのみを食草とし、明るく開けた草原、河川の土手、水田の畔（あぜ）などに生息します。かつては、東北や関東地方にも分布していましたが、今では長野県内３カ所（安曇野市・東御市・飯山市）と九州の阿蘇地方にしか生息していません。

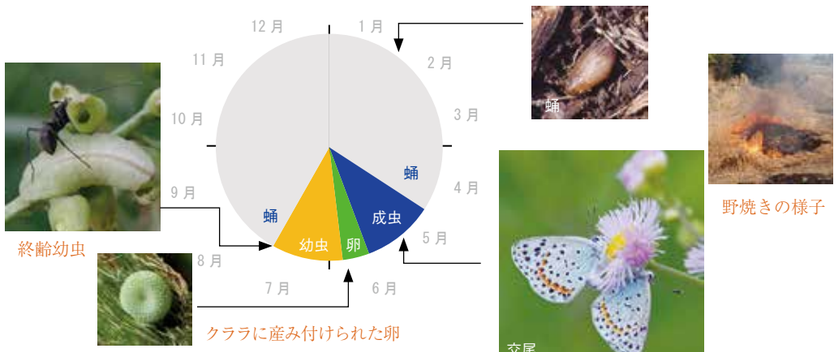


クララってなぁ～に？

クララは、マメ科の多年生草本で、草丈は、１m～1.7mほど。５月末～６月に白い花が咲きます。葉や茎に毒があり、古くからハエの幼虫の駆除のため利用されてきました。安曇野にもゴウジコロシの別称が残っています。しかし殺虫剤が普及し、家畜が食べない草であることから刈り取られることが多くなり、水田の圃場（ほじょう）整備などでほとんど姿を消してしまいました。幸いなことに、国営アルプスあづみの公園内にクララが残っており、オオルリシジミの保全につながりました。最近は岩原区を中心に民家の庭や田畑の畦（あぜ）に植える活動が始まったことで、オオルリシジミの生息地が公園の外へと広がってきています。

オオルリシジミの生活史

オオルリシジミは年に一度、５月中旬頃に成虫が発生し、６月にかけて食草のクララの蕾（つぼみ）に産卵します。約1週間で幼虫となりクララの蕾（つぼみ）と花を食べ成長します。幼虫は、大きくなると体から蜜を出し、その蜜を求めてアリがまとわりつくため、ハエやハチなどの天敵が近づきにくくなります。幼虫期間は約1カ月で、7月から翌年5月までは土の中で蛹（さなぎ）で過ごします。



安曇野における オオルリシジミ 保護活動の歩み

- 1991　安曇野のオオルリシジミの記録がこの年を最後に途切れる
- 1994　旧堀金村で再発見
- 1995　安曇野オオルリシジミ保護対策会議を設立
  採集自粛の啓発、パトロールを開始
- 1999　国営アルプスあづみの公園（以下 国営公園）に保護区が設置される
  累代の人工飼育成功
  多くの蝶を確保できるようになり、蛹を放す活動準備が整う
- 2000　国営公園でオオルリシジミの乱舞が見られる
- 2001　産卵は順調であったが、幼虫の数が少なく、天敵の解明が課題となる
- 2005　信州大学に調査依頼
- 2006　卵や幼虫の９割が天敵等により死滅していることが判明
- 2009　メアカタマゴバチが最大の寄生要因であり、野焼きに寄生を減らす効果があることを実証
  これより国営公園保護区で毎年野焼きを実施
- 2011　オオルリシジミの自然発生個体の増加を確認
- 2013　地元岩原区での保護活動がスタート
- 2017　行政と市民が共同で、烏川県営圃場整備計画地内のクララ100株以上を保護区周辺に移植
- 2019　保護区以外の場所でも生息が確認される
- 2020　生息域を全市に拡大するため、クララを市民に配布